令和6年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業
（地域課題対応支援事業）

「みんなのキンビ」プロジェクト

令和6年度　実施報告書

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会

Index [もくじ]

はじめに ……1

「みんなのキンビ」プロジェクト概略 ……2

Ⅰ　～であう・まなぶ・つながる～「みんなのキンビ」プロジェクトについて ……5
　1 概要 ……5
　2 当館及び関係機関の役割 ……6
　3 活動実績 ……6

Ⅱ　しかける～「みんなのキンビ」プロジェクトをうごかす組織づくりとネットワークの構築 …… 7
　1 「みんなのキンビ研究会」の実施 ……7
　2 キンビコミュニケータ講座 …… 10

Ⅲ　うごかす～地域とのアートプロジェクトの実践 …… 14
　1 認知症の方や高齢の方を対象とした　アート鑑賞プログラム …… 14
　2 様々な事情でアートに接する機会が少ない子ども・若者を対象とした
　「キンビ美術部」 …… 16
　3 アートを通した学校との連携 …… 21
　4 「メタバース×キンビ」を活用した対話型鑑賞プログラム …… 25
　5 産業、福祉、教育など多様な機関が開発・展開する
　「鑑賞支援ツール」 …… 29
　6 特別展「笑う！はひふへほ展」の開催 …… 35

Ⅳ　のこす～プロジェクトのアーカイブ化と公開～ …… 41

Ⅴ　ふりかえる～評価とフィードバック～ …… 41

Ⅵ　今後に向けて（成果と課題） …… 42

要綱 …… 44

あとがき …… 47

はじめに

「みんなのキンビ」プロジェクトは、県南の横手市にある秋田県立近代美術館を中核に多様な主体との連携・協働する3年計画の事業です。本事業は、年齢や障害の有無等にかかわらず美術を通して人々が出会い、ともに学び合える場を創造することで、「障害者の生涯学習」の促進や地域のつながりづくり、地域活力の向上などに寄与することを目的としています。

本プロジェクトは、昨年度に引き続き文化庁の「Innovate MUSEUM事業（地域課題対応支援事業）」に採択されました。今年度は新たに、様々な事情でアートに接する機会が少ない子ども・若者を対象としたアート活動や、認知症当事者を含む高齢者とのアート鑑賞プログラムの実践など、より地域課題に対応した取組を展開することができました。昨年度から継続している活動においても、その成果と課題を踏まえ、さらに充実した取組へと展開してきております。本事業の推進にご支援、ご協力をいただいた皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

近年、急速に変化する社会において、美術館がいかに地域の文化や人々をつなぐ存在となれるかが問われています。当館を中核とした協働関係はいまだ構築の途上ではありますが、着実に歩みを進めています。今後、「みんなのキンビ」プロジェクトの実践が、これからの美術館が担う社会的役割の一つの方向を示していけるよう、さらに取組を進めてまいります。

本冊子は令和6年度の実施事業を報告するものです。ぜひご高覧いただき、多くの方に「みんなのキンビ」プロジェクトを知っていただく機会となることを願っております。

令和7年3月

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会会長
（秋田県立近代美術館・館長）
田中　博光

～であう・まなぶ・つながる～「みんなのキンビ」プロジェクト

令和６年度　プロジェクトテーマ「アート×高齢者×Museum」

本プロジェクトは、これからの博物館に新たに求められる社会や地域における様々な課題に対応する取組、博物館の組織連携・ネットワークの形成を通じた課題解決への取組への支援を通じて、博物館の機能強化の推進を図る「Innovate MUSEUM事業（地域課題対応支援事業）」（文化庁）に採択され、近代美術館を中核に令和5年度から取り組んでいるものです。

目的

近代美術館を中核に、多様な主体との連携・協働により、地域課題に対応しながら、年齢や障害の有無等にかかわらず、アートを通じて多様な人々が出会い、学び合う場を創出するとともに、「障害者の生涯学習」の促進や地域のつながりづくり、地域活力の向上に寄与します。

背景

改正博物館法施行（令和5年4月）によって、美術館や博物館には新しい価値の創造や、社会包摂を含む多様な地域課題への貢献等の役割が求められています。

誰もが生涯を通じて文化や芸術を楽しみ、地域や他者とつながることで心豊かな生活ができるように、多様な人との対話の場や社会参画の機会をつくります。

専門機関

NPO法人アーツセンターあきた
NPO法人アートリンク うちのあかり
秋田県産業技術センター

- プロジェクトのシンクタンク
- スキームの提案
- プロジェクトの質の担保

学　校

小学校、中学校
義務教育学校
高等学校、特別支援学校、
（適応指導教室）等

- 「交流及び共同学習」の実施主体
- プロジェクトの協働

行　政

秋田県
秋田県教育委員会
横手市

- ファシリテーション
- 協働・実践の環境づくり
- 気運の醸成

キンビ

秋田県立近代美術館

- プロジェクトの中核館
- 取組のマネジメント

1 しかける

プロジェクトをうごかす組織づくりとネットワークの構築

- 多様な主体が協働する「実行委員会」
- シンクタンク**「キンビ研究会」**
- **キンビコミュニケータの育成…「まなび」と「実践」**
- 県立4博物館施設のネットワークによる取組の横展開

2 うごかす

地域とのアートプロジェクトの実践

- **認知症当事者を含む高齢者を対象としたアート鑑賞プログラム**
- 教育的・社会的支援の必要な子どもたちを対象とした**「キンビ美術部」**
- アートを通して「共生社会の担い手」を育む「交流及び共同学習」
- 産業、福祉、教育など多様な機関が開発・展開する**「鑑賞支援ツール」**
- **「メタバース×キンビ」を用いた「鑑賞・交流プログラム」**

3 のこす

プロジェクトのアーカイブ化と公開

- AR機能を活用した実施報告書の作成と公開

4 ふりかえる

評価とフィードバック

- 実行委員会①…計画の策定、評価方法、目標の共有
- 実行委員会②…評価とフィードバック、次年度に向けた改善提案

令和６年度の主な事業紹介

キンビコミュニケータ事業

キンビコミュニケータ※を育成します。
<「まなび」と「実践」の場を提供>

※キンビコミュニケータ：人とアートのつなぎ手。能動的に活動する実践者として、美術館を拠点に「出会い」や「学び」の機会を作り出していく存在。現在、高校生から70代までの23名が参加。

認知症当事者含む高齢者を対象としたアート鑑賞プログラム

美術館の資源を活用し、高齢者（認知症当事者含む）とその家族、介護者を対象にアート鑑賞プログラムを実施します。

キンビ美術部

教育的・社会的な支援が必要な子どもたちを対象に、アーティストとの交流や県立博物館施設の教育普及プログラムの体験等を開催します。

交流及び共同学習

校種や学齢等を超えて、アートを通した交流及び共同学習を実施しその成果や記録を、「みんなのキンビ展」で公開します。

「メタバース×キンビ」による鑑賞・交流プログラム

県内外の児童生徒がそれぞれの学校に居ながら、仮想近代美術館「メタバース×キンビ」で出会い、鑑賞・交流するプログラムを実施します。

鑑賞支援ツール

県産業技術センター、企業、県立視覚支援学校が協働し、令和5年度に開発した鑑賞支援ツールの改良に取り組みます。より多様な人が鑑賞できるもの、より楽しめるもの、学校や福祉施設等の教材として活用できるものを目指します。

「みんなのキンビ展」II

【テーマ】いっしょにつくる
【会　期】令和7年2月8日（土）～3月9日（日）
【趣　旨】昨年に引き続き、「みんなのキンビ」プロジェクトの成果展を開催します。プロジェクトの成果物の展示、ワークショップの企画・開催はキンビコミュニケータや市民と協働で行います。

「出前美術館　みんなのキンビ展」

「あきた総合支援エリア　かがやきの丘」で当館の所蔵作品を展示し、秋田県立秋田きらり支援学校、秋田県立視覚支援学校、秋田県立聴覚支援学校の生徒、保護者、地域の方にご覧いただきます。

本書は、「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会による「～であう・まなぶ・つながる～『みんなのキンビ』プロジェクト」の、令和6年度の成果報告書である。本事業並びに本書の発行は「令和6年度Innovate MUSEUM事業（地域課題対応支援事業）」の助成を受け実施した。

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会

会長	田中博光	秋田県立近代美術館・館長
副会長	藤　浩志	NPO法人アーツセンターあきた・理事長 秋田公立美術大学・教授
委員	安藤郁子	NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事 秋田公立美術大学・教授
委員	小野浩子	横手市市民保健部まるごと福祉課　包括ケア推進係保健師・副主幹
委員	内田富士夫	秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・部長
委員	綾瀬アデルジャン	秋田県産業技術センター　電子光応用開発部・主任研究員
委員	瀬川　侑	秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・研究員
委員	岸上恭史	秋田公立美術大学附属高等学院・教諭
委員	柴田　豪	秋田県立横手支援学校・教諭
委員	田口朋美	秋田県立横手清陵学院高等学校・教諭
委員	古屋桃花	秋田県教育庁生涯学習課・課長
事務局	木村雅洋	秋田県立近代美術館・学芸主事（兼）チームリーダー
事務局	保泉　充	秋田県立近代美術館・主査（兼）学芸主事
事務局	照井裕奈	秋田県立近代美術館・主任
事務局	北島珠水	秋田県立近代美術館・学芸主事
オブザーバー	森川勝栄	秋田県教育庁生涯学習課・主任学芸主事

I ～であう・まなぶ・つながる～
「みんなのキンビ」プロジェクトについて

1.概要

～であう・まなぶ・つながる～「みんなのキンビ」プロジェクトは、秋田県立近代美術館を中核に多様な主体との連携・協働により、地域課題に対応しながら、年齢や障害の有無等にかかわらず、アートを通じて多様な人々が出会い、ともに学び合える場を創出し、「障害者の生涯学習」の促進や地域のつながりづくり、地域の活力向上等に寄与することを目的とした事業である。

令和6年度の事業内容は次のとおりであり、文化庁「Innovate MUSEUM事業（地域課題対応支援事業）」の助成を受け実施した。

●しかける～プロジェクトを動かす組織づくりとネットワークの構築

- 多様な主体で構成された実行委員会
- シンクタンク「みんなのキンビ研究会」によるプロジェクト立案、スキーム提案、専門的知見の提供
- 人とアートのつなぎ手として能動的に活動する実践者「キンビコミュニケータ」による学びと実践
- 県立４博物館施設のネットワークによる取組の展開

▲うごかす～地域との協働アートプロジェクトの実践

- 認知症当事者を含む高齢者とのアート鑑賞プログラムの実施と検証
- 「キンビ美術部」による様々な事情によりアートに接する機会の少ない子どもたちを対象にした体験活動と交流機会の提供
- 産業、福祉、教育など多様な機関との協働による「鑑賞支援ツール」の開発と展開
- 共生社会の担い手を育む、アートを通した交流及び共同学習の実践
- 「メタバース×キンビ」による鑑賞プログラムの実践
- 市民の参画による特別展「笑う!はひふへほ展」の開催

■のこす～プロジェクトのアーカイブ化と公開

- 各事業の記録映像の制作と公開
- コミュニケータ、プロジェクト参加者によることばの収録
- AR機能の活用による実施報告書とHPの連動

◆ふりかえる～評価とフィードバック

- 実行委員会の開催（①「計画の策定と評価方法、目標の共有」、②「評価とフィードバック、次年度に向けた改善策提案」）
- PDCAサイクルを回す（C⇔Aを重視）

2.当館及び関係機関の役割

秋田県立近代美術館［中核館］

・プロジェクト全般の渉外事務　・事業の進行管理、調整企画　・人材の育成、実践の支援

NPO法人アーツセンターあきた［学術研究・高等教育］

・スキームの提言、プロジェクトの協働、専門的知見による助言

NPO法人アートリンクうちのあかり［障害者の生涯学習］

・スキームの提言、プロジェクトの協働

秋田県産業技術センター［技術改善・開発支援］

・スキームの提言、プロジェクトの協働

横手市市民福祉部まるごと福祉課［福祉行政］

・スキームの提言、プロジェクトの協働

各学校［美術による交流及び共同学習］

・共生社会志向の気運醸成、交流及び共同学習の実施

3.活動実績

●しかける　▲うごかす　■のこす　◆ふりかえる

令和6年（2024）		[場所]
4月23日（火）	▲第1回鑑賞支援ツール作成検討会	[秋田県産業技術センター]
5月～	●キンビコミュニケータ募集開始	
5月中	▲キンビ美術部ニーズ調査と子どもたちとの顔合わせ	
6月16日（日）	●第1回キンビコミュニケータ講座　キックオフイベント	[秋田県立近代美術館]
6月24日（月）	▲第2回鑑賞支援ツール作成検討会	[秋田県立視覚支援学校]
7月 4日（木）	◆第1回「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会	[秋田県立近代美術館]
7月 9日（火）	▲第3回鑑賞支援ツール作成検討会（オンライン）	
7月14日（日）	●第1回みんなのキンビ研究会	[秋田県立近代美術館]
7月16日（火）	▲キンビ美術部①（横手市適応指導教室　西かがやき教室、南かがやき教室）	
7月23日（火）	▲キンビ美術部②（秋田県立横手高等学校定時制課程、スペースイオよこて）	
7月25日（木）	▲第4回鑑賞支援ツール作成検討会	[秋田県立近代美術館]
7月27日（土）	●第2回キンビコミュニケータ講座	[秋田県立近代美術館]
9月 1日（日）	●第3回キンビコミュニケータ講座	[秋田県立近代美術館]
9月 3日（火）	▲キンビ美術部③（秋田県立角館高等学校定時制課程）	
9月14日（土）	●第2回みんなのキンビ研究会※同日開催	[秋田県立近代美術館]
	▲第1回アートリップ※同日開催	[秋田県立近代美術館]
9月18日（水）	▲キンビ美術部④	[秋田県立美術館]

●しかける ▲うごかす ■のこす ◆ふりかえる

令和6年(2024)		[場所]
10月 1日(火)	▲キンビ美術部⑤	[秋田公立美術大学]
10月20日(日)	●第4回キンビコミュニケータ講座	[秋田県立近代美術館]
10月23日(水)	▲横手支援学校と増田高等学校との交流及び共同学習①(オンライン)	
10月24日(木)	●第3回みんなのキンビ研究会・第5回鑑賞支援ツール作成検討会	[秋田県立近代美術館]
10月 31日(木)	▲キンビ美術部⑥	[地蔵田遺跡「弥生っこ村」]
11月 2日(土)	●第5回キンビコミュニケータ講座	[秋田県立近代美術館]
11月 7日(木)	▲キンビ美術部⑦	[秋田県立近代美術館]
11月16日(土)	▲病気の子どもの教育支援フォーラム・メタバース×キンビ体験	[カレッジプラザ]
11月23日(土)	▲第2回アートリップ※同日開催	[グループホーム康々園]
	▲第3回アートリップ※同日開催	[グループホームりんご村]
11月30日(土)	●第6回キンビコミュニケータ講座	[秋田県立近代美術館]
12月 2日(月)	▲鑑賞支援ツールレビュー	[秋田県社会福祉会館]
12月 3日(火)	▲高齢者とのメタバース×キンビによる所蔵作品の鑑賞	[株式会社ALL-A]
12月 4日(水)	▲横手支援学校と増田高等学校との交流及び共同学習②(オンライン)	
12月 9日(月)	▲出前美術展inかがやきの丘 ～12月13日(金)	[あきた総合支援エリアかがやきの丘]
12月13日(金)	▲ワークショップ「粘土と友達!粘土で友達!」	[あきた総合支援エリアかがやきの丘]
12月14日(土)	▲第4回アートリップ	[秋田県立美術館]
12月15日(日)	▲第5回アートリップ	[介護付き有料老人ホームさらさ横手]
12月16日(月)	▲横手支援学校と増田高等学校との交流及び共同学習 ③	[秋田県立増田高等学校]
12月20日(金)	▲キンビ美術部⑧	[秋田県立近代美術館]
12月21日(土)	●第7回キンビコミュニケータ講座	[秋田県立近代美術館]

令和7年(2025)		[場所]
1月11日(土)	●第8回キンビコミュニケータ講座	[秋田県立近代美術館]
1月20日(月)	▲横手支援学校と増田高等学校との交流及び共同学習	[秋田県立近代美術館]
2月 1日(土)	●第9回キンビコミュニケータ講座	[秋田県立近代美術館]
2月 4日(火)	▲キンビ美術部⑨	[秋田県立近代美術館]
2月 8日(土)	▲「みんなのキンビ」プロジェクト企画「笑う!はひふへほ展」～3月9日(日)	[秋田県立近代美術館]
2月14日(金)	◆第2回「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会	[秋田県立近代美術館]

関連イベント

2月8日(土)	オープニングイベント
2月9日(日)	「うちのあかり」メンバーとのトーク＆アートセッション
2月22日(土)	カフェ７階
2月23日(日)	おしゃべり鑑賞会
3月1日(土)	「笑う!はひふへほ展」解剖＆解説ツアー
3月2日(日)	カフェ７階、おしゃべり鑑賞会
3月9日(日)	クロージング座談会「笑いの部屋」

Ⅱ しかける
「みんなのキンビ」プロジェクトをうごかす組織づくりとネットワークの構築

1.「みんなのキンビ研究会」の実施

シンクタンク機能「みんなのキンビ研究会」では、国内外の先進的取組事例を参考に、アート、福祉、教育、産業技術等多様な分野の専門家とともに、秋田県の課題の解決と、美術館の未来について、3回にわたり議論を重ねた。

【第1回みんなのキンビ研究会】

日　時　令和6（2024）年7月14日（日）13：30～16：00

講　師　東京藝術大学 社会連携センター・教授　伊藤達矢氏

テーマ　ミュージアムから生まれるアートコミュニティ～講演会とグループディスカッション～

参加者　24名（内キンビコミュニケータ14名）

対　象　一般市民

内　容　美術館を活用した対話のある社会・コミュニティの実現に向け、東京藝術大学と東京都美術館の「とびらプロジェクト」の実践例を交え講演が行われた。「コミュニケータ」は美術館の単なるサポーターではなく、ともにコミュニティを創出する「プレイヤー」であること、これからの美術館は、多様な価値観を持つ人々が集い、対話や学びを通してつながりを生み出す場を目指すべきであることなどが、講演とグループディスカッションを通して共有され、「みんなのキンビ」プロジェクトが目指す方向性が明確化された。

▲積極的な意見交換が行われた

第1回「みんなのキンビ研究会」
参加者のことば

- 先生の講演を聞いて、受動的だった自分に気づいた。キンビコミュニケータ講座に参加して満足するのではなく、秋田のために何ができるか考えていきたいと思った。
- コミュニティを通じて障害、年齢や立場の違いのある人の中で、何に困っているのか何が必要なのかを聞く場、意見を交わす場をつくっていきたい。
- 先生の講演から、自己実現を皆ですることがコミュニティを長く続ける秘訣と学んだ。誰かのためでなく、自分がやりたいことを皆で実現することが大切。
- 年代の幅もあって、考えつかない意見があり、おもしろかった。
- コミュニケータは人材育成ではなく、コミュニティを育む存在であるということが新たな学びであった。コミュニケータの考え方だけでなく、チームビルディングという意味で大変勉強になった。
- アートを通して社会のつながりを考えるという話に感銘した。今回は、人と話すことの楽しさを感じた。年代や職業など違うところから視点をいろいろいただける。
- 「聞く力」の大切さを感じた。聞く人がいるから話をすることができる。様々な視点から物事の捉え方を学べると思った。

【第2回みんなのキンビ研究会】

日　時　令和6（2024）年9月14日（土）

10：30～11：30　認知症の方や高齢の方との対話を通したアート鑑賞プログラム「ARTRIP」の体験および見学

13：30～15:50　研究会（講演及びグループディスカッション）

講　師　一般社団法人ArtsAlive・代表理事　林　容子氏

テーマ　「認知症のための非薬物療法としての対話型鑑賞「ARTRIP」の実践とその効果」

参加者　アート鑑賞プログラム体験7名　見学13名、　研究会17名

対　象　一般

内　容　近年アートが人々の健康や治療に与える好影響が、世界中の医療・介護の現場で注目されていている中、その先駆けとして20年間実践を重ねているARTRIPの現場エピソードや医学的な検証について講演いただいた。参加者の半数以上が認知症の家族介護者、「認知症の人と家族の会」会員、高齢者施設の介護士など介護現場の関係者であり、グループディスカッションでは熱心な意見交換が行われた。年齢を問わずアートを通じた社会参画やコミュニケーションの場づくりを目指す「みんなのキンビ」プロジェクトにとって大きな示唆をいただく取組となった。

▲アート鑑賞プログラム体験と見学

▲グループディスカッション

第2回「みんなのキンビ研究会」参加者のことば

- アートと認知症や介護とのつながりや可能性について知ることができた。
- 認知症とアートはつながる、治療の一つになりうることが分かった。美術館は敷居が高い、アートは難しいと思っていたが、見方は自由でいい、思ったことを言葉にしていい、だから認知症の人も含めてみんなで楽しめると感じた。
- アートを通じた活動は、人とのつながり、社会とのつながりを増やすためにとても有効だと感じた。
- 認知症になっても明るく生きられる可能性を感じた。このような取組が他の施設にも広がると高齢化が進む秋田県の課題解決になるのではと感じた。
- 新しい美術館に変わろうとする姿勢を感じた。行政や病院、地域など様々なところと連携するともっと広がっていくと感じる。

【第3回みんなのキンビ研究会】

日　時　令和6(2024)年10月24日(木) 14：00～16：30

講　師　跡見学園女子大学・教授 茂木一司氏
星美学園短期大学日伊総合研究所　大内 進氏
宮城教育大学・准教授 梶原千恵氏
一般社団法人秋田県視覚障害者福祉協会　高橋順子氏

テーマ　鑑賞を支援するツールを作成することの意義

対　象　鑑賞支援ツール作成メンバー　6名

内　容　「みんなのキンビ」プロジェクトの取組のでは、美術作品を「見る」ことに限定せず、様々な感覚を用いた鑑賞方法を模索し、障害のある方へのアクセシビリティ向上と多様な人々との鑑賞機会拡充を目指している。その一環として、鑑賞支援ツール作成に関する専門家や視覚障害者の方々を招き、意見交換を実施した。具体的な成果物に対する講評を踏まえ、今後のツール作成に向けて以下の2点を確認した。

❶鑑賞支援ツールは作品の「翻訳」であり、伝えたいこと、すなわち見どころの明確化が重要である。

❷絵画の見方は多様であり、鑑賞支援ツールの活用によって様々な人々がともに鑑賞し、「分からなさの共有」を通じて作品の理解を深める場を作ることが必要である。

▲視覚に障害のある方のレビュー

◀作成物への講評と講義

2.キンビコミュニケータ講座

「キンビコミュニケータ講座」は、美術館・博物館が年齢や障害の有無等にかかわらず、生涯を通じてアートを楽しめる場となるよう、人と作品、人と人とをつなぐ「キンビコミュニケータ」の育成を目的とした学びと実践の場であり、全9回の講座と4回のワークショップが実施された。

(1) 募集と参加人数について

令和6年度の応募条件は、「美術または美術館に関心があり、積極的に学び活動する意欲のある高校生以上の方」とし、ホームページ、SNS、チラシ等で広報した。秋田県生涯学習奨励員協議会（会員570名）の協力も得て、県内広域から、高校生から70代まで26名の応募があった。

(2) 講座の内容について

6月のキックオフイベントを皮切りに、月1回（11月は2回）の講座を開設した。10月までの前半は、秋田県生涯学習センター社会教育主事を講師に迎え、「誰もが美術館で楽しむためには」をテーマに、熟議を中心とした5回の講座を実施した。熟議では、参加者が互いの思いを語り合い、傾聴することで、プロジェクトの目標を共有し、各自希望を明確にすることを目指した。

また、昨年度の課題であったキンビコミュニケータの目指す姿や役割を明確化するため、東京藝術大学教授・伊藤達矢氏を講師に迎え、講座を開催した（「みんなのキンビ研究会」：7月14日実施、一般公開講座。「第4回キンビコミュニケータ講座」：9月14日）。伊藤氏には、東京藝術大学の「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」事業や、東京都美術館と東京藝術大学の「とびらプロジェクト」の実践例を交えながら、「アートコミュニケーション」とは美術館や作品を活用した対話型社会を目指す取り組みであり、「コミュニケータ」とは「教えられる存在」ではなく「美術館と共にコミュニティを育む存在」であるという講義をしていただいた。

11月からの後半では、前半の熟議で出された100を超える多様なアイデアをもとに、実践に向けた企画立案に取り組んだ。

2月8日開催の「みんなのキンビ」プロジェクト企画、特別展「笑う！はひふへほ展」のワークショップとして、以下の4企画が実施された。また、館内外の彫刻を視覚障害者とともに鑑賞する定期ツアーや、駐車場から美術館入口までの長いアクセスに設置する「誰もが座りたくなる椅子」を秋田公立美術大学と共同制作する案などが出され、実現に向け継続的に検討される。

❶秋田蘭画代表作《不忍池図》を視覚に障害のある方と一緒に楽しむ「おしゃべり鑑賞会」
ジオラマやレリーフ状の「さわってみる絵」等の鑑賞支援ツールを活用した対話型鑑賞

❷キンビコミュニケータ作品とワークショップを楽しむカフェ
作品を通じた会話や、折り紙・紙粘土などの創作を通じて、誰もがくつろげる空間を提供

❸「生きづらさ」についてアートを介して共有する「おしゃべりお茶っこの会」
イラストや会話を通じて「表現すること」を提案し、「生きづらさ」を抱える人々の交流を促進

❹みんなでつくる「キンビの笑う城」
「みんなのキンビ展」の入り口を飾る作品として、誰でも自由参加できる作品の制作

▲秋田県生涯学習センター社会教育主事のファシリテートによる熟議

▲伊藤達矢氏によるオンライン講座

▲「誰もが美術館で楽しむため」のアイデア

▲熟議の振り返り

▲アイデアを企画として練り上げる

(3) キンビコミュニケータの言葉(抜粋)

第1回キンビコミュニケータ講座

- キンビコミュニケータって何をするの?って思ったけどまだ分からない。分からないからスタートできる、分からないが言えるプロジェクト、今までと違う!楽しい。
- まだよく分からないけど久しぶりに話ができた。楽しかった。これからも参加します。
- 全く分からなかった。何をしてほしいのか美術館が方向性を示した方がいいのでは。
- いろいろな立場からの視点、そこから出てくる言葉、笑い、苦悩などなど様々な色が見えてとても楽しかったです。年齢、性別関係なく、分からないことを恥じなくてもいいと改めて感じました。
- 考え方が違うからこその楽しさが感じられた。アートの楽しさを誰でも感じられるようにしたいと思った。
- 場をつくることの大切さを学びました。場が人の楽しさをつくったり、学びをつくったりすることや、きっかけは何気ない日常にあることを学びました。

第4回キンビコミュニケータ講座

- 美術館は完成された場所だと思っていたけれど、何かを完成させる通過点?のようなものだと思えるようになりました。
- 普段大学では、美術館の現状だったり、困難なことだったりとネガティブな話を聞く機会が多く、私自身、美術館は難しいかもと決めつけてしまうことが多かったので、美術館を楽しいものにしていくキンビコミュニケータの皆さんに刺激をもらいました。
- 誰もが美術館を楽しむためには敷居を下げればいいという考えが変わり、いろいろな人と一緒に作品を見る場をつくり、見る力をつけることが大切だと思いました。
- 美術館は来てもらうのがゴールという考えから、美術館に来てもらい、そこから何かを皆で作れるような活動をしたいと思いました。
- いろいろな年齢や職業の方がいたからこそいい案が出るし、自分一人では絶対に思いつくことがない企画が出せたと思います。さらに関わりを増やしていけるようがんばります。

活動を振り返って

●本講座を受ける中で、自分と美術館、芸術、地域との関わりについて考えさせられました。美術館を開いていきたい、様々な人と共に芸術を楽しみたいと思わせられると同時に、自らも芸術をより積極的に楽しもうと前向きになれました。どんな人にも寄り添える美術館になれたら良いと思っています。

●秋田で何ができるだろうと不安でした。でも、やりたいことができるというので、美術館へのワクワクは普段より増していきました。キンビコミュニケータの皆さんとの話し合いも回を重ねるごとに楽しくなりました。雪の降らない時期だとよかったと思います。雪寄せや移動に時間がかかって予定を立てるのに不安がありました。…LINEデビュー1週間で連絡を取り合いましたが、企画の内容を進めるよりもそちらのほうが大変でした。

●講座で印象に残っていることは、目隠しをして美術館を2人が組となったペアに案内してもらったことです。制限があることで、見慣れた美術館でも見方が180度変わりました。見えない不安もありましたが、音や、手の感覚、ペアの案内で味わう美術館は新鮮でした。

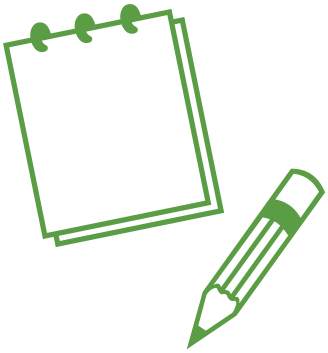
●美術館にもっと関わりたい、芸術と地域との繋がりを考えたいと思っていた方々がたくさんいたことが嬉しかったです。その人数だけの美術館でやりたいことのアイデアは今後の活動にもつながりそうで、まだまだ楽しみが続くと期待しています。

●キンビコミュニケータ講座に参加して感じたのは、参加している人たちの個性の豊かさ。年齢も性別も生きてきた時代や背景も全然違う。詳しくそれを説明するわけじゃないけれど、講座の向き合い方や出てくる意見を見て、私からは想像もつかないこと、あるいは共感できるような意見があったりして、一人ではなく複数の人たちでその意見を軸に語り合ったりだとか…「キンビコミュニケータ」としてこんなにも色んな人たちと同じ（?）立場で話ができるのは、久しぶりというか、新鮮な気持ちで、素直にワクワクしました。…それぞれのペースを咎めない雰囲気があったのはとても有り難かったです。企画やコミュニティを継続させるためにはとても大事なことだよな、と改めて感じたところでした。

●IT機器は大の苦手で、キンビ研究会でのリモート講演には驚きました。なるほど今はこんな時代なのだと今更ながら古い頭で認識しました。実物に触れることの感動は代えがたい魅力であるが、こうした機器を活用すればもっと多くの人や児童生徒たちにも出前美術講座などができ、美術の新たな可能性の広がりにつながるのだと思いました。

●キンビコミュニケータに参加してみて、初めて美術に関する活動に参加しとても貴重な経験をすることができたと感じました。わたしが最初に参加したのは、東京藝術大学の伊藤達矢教授とともにアートとコミュニケーションについて講義を受けた回です。講義を聞き、自分の考えを自分なりに表現し、キンビコミュニケータのみなさんと一緒にグループでアートとコミュニケーションについて話を深めて、美術館などが人々のコミュニケーションにどのように関わり効果をもたらすのかを考えることができました。また生涯学習センターの方々との回では、ペアを組み一人が目隠しをして、もう一人が美術館内を誘導する体験をしました。視覚障害の方の世界を実際に体験し館内を散歩した際、今まであまり詳しく知ることのできなかった視覚障害者の大変さを感じることができた貴重な経験になりました。
受験などもあり、参加できなかった回が多くありましたが、参加した一つ一つがとても楽しかったです。キンビコミュニケータとして得られた経験を将来に関わらせていきたいです。

●最初は初めて会う人ばっかりで少し緊張していました。年齢も住む場所も違っていて、当然考え方も違っていました。講座で話し合いをすると、そう言う見方もあったか！そんな経験をしてきたのか！と自分と違う見え方のする世の中を知れた気がします。中には、この人合わないな、苦手だな、となることもありました。でも、それもお互い考えを出し合ったからこそ知れたのだと思います。普段ならもう距離を取ることにしますが、良くも悪くもキンビでは顔を合わせまた話さないといけません。苦手な人とも、キンビに行かなければ合わなかったであろう人とも一緒に活動できるところがキンビのいいところだと感じました。予定が合わず毎回の参加はできませんでしたが、自分の考えも深められて、いろんな人のお話が聞けて楽しかったです。



Ⅲ うごかす
～地域とのアートプロジェクトの実践

1.認知症の方や高齢の方を対象としたアート鑑賞プログラム

本取組は、誰もが生涯を通じて文化や芸術を楽しみ、地域や他者とつながることで心豊かな生活ができるように、認知症の方や高齢の方を対象に美術館や博物館の資源を介した社会参画の機会を拡充することを目的にしている。

令和6年度は、美術館等の資源を活用し、認知症の方や高齢の方とその家族・介護者を対象としたアート鑑賞プログラム「ARTRIP（アートリップ）※」を6回実施した（当館を含む美術館で3回、高齢者施設等アウトリーチで3回実施）。本鑑賞プログラムは「あきた型鑑賞プログラム」の構築を目指したモデル実施として行い、次年度以降も継続して実施予定である。

※ARTRIP：ニューヨーク近代美術館(MoMA)ではじまり、それを元に一般社団法人ArtsAliveが日本で開発した対話型アート鑑賞プログラム

（1）実施内容（ARTRIP）

アートコンダクター：一般社団法人ArtsAlive代表　林 容子氏

【第1回】
- 日　時　令和6（2024）年9月14日（土）10：30～11：30
- 会　場　秋田県立近代美術館　6階
- 対　象　横手市、湯沢市在住の認知症の方や高齢の方　7名

【第2回】
- 日　時　令和6（2024）年11月23日（土）10：30～11：30
- 会　場　グループホーム康々園（横手市）
- 対　象　グループホーム　康々園利用者様　8名

【第3回】
- 日　時　令和6（2024）年11月23日（土）14：30～15：30
- 会　場　グループホームりんご村（横手市）
- 対　象　グループホーム　りんご村利用者様　8名

【第4回】
- 日　時　令和6（2024）年12月14日（土）14：30～15：30
- 会　場　秋田県立美術館（秋田市）
- 対　象　サービス付き高齢者向け住宅　さらさ秋田駅前利用者様　4名

【第5回】

日　時　令和6（2024）年12月15日（日）10：30～11：30

会　場　サービス付き高齢者向け住宅　さらさ横手（横手市）

対　象　サービス付き高齢者向け住宅　さらさ横手利用者様　18名

【第6回】

日　時　令和7（2025）年2月8日（土）13：00～14：00

会　場　秋田県立近代美術館　5階

対　象　グループホーム康々園利用者様、ふれ愛塾参加者様　10名

ARTRIP参加者のことば
（介護士の方の感想含む）

- 対話の中で広い見方、楽しみ方を知りました。共感したり、考えたり、脳の活性化になりました。
- 進行が素晴らしく美術館に親近感がもてた。豊かな気持ちにさせられた。
- みんなが自由に気楽に思い思いの発言ができたことは大変よかった。
- 他の美術館でも近代美術館が主催して行ってほしいです。
- 美術館で鑑賞するときに会話をすることはなかったので新鮮でした。興味深く見学しました。回想法とは違う点で感激しました。脳の働く部分が違うと感じました。
- 公民館とかもっと身近な場所でもやってほしい。
- とても楽しそうに作品を見ながら会話をしていて第3者から見ても楽しそうでした。普段じっくり絵を見る機会がないのでとてもよかったです。皆さんお話が止まらず満足されていました。
- 帰りの車中は、アートリップの体験のことで盛り上がっていました。
- 対話型にとても緊張されていたが次第にイメージが膨らんできたり、昔のことを思い出されたりする様子が見て取れた。普段されない話（聞いたことがない話）もされていた。
- 終わった後も思い出話をされて楽しそうだった。鑑賞後は「疲れた」とのお声があり、その晩は皆さん早めに休まれました。
- 外出するには調整が難しいところ、「美術館がやってくる」体験は嬉しいことでした。ありがとうございました。

▲第1回目の様子［秋田県立近代美術館］（横手市）

▲第5回目の様子［さらさ横手］（横手市）

▲第4回目の様子［秋田県立美術館］（秋田市）

2. 様々な事情でアートに接する機会が少ない子ども・若者を対象とした「キンビ美術部」

「キンビ美術部」は、社会的に孤立しがちな子ども・若者や、アートに触れる機会の少ない子ども・若者を対象に、創作ワークショップや県立博物館等での体験・鑑賞学習を計7回実施し、アートを通した体験活動と交流機会を提供した。

(1) 募集について

募集にあたって、横手市内の適応指導教室や高等学校定時制課程（近年は不登校・中退経験者、特別な支援を要する生徒、経済的困難を抱える生徒など多様な課題を抱える生徒が多数在籍）へ情報提供を行った結果、小学生から高校生まで23名の児童生徒が参加しました。適応指導教室や定時制課程の担当者からは、アニメやイラストなどアートを好む児童生徒が多いこと、教育課程に美術が設定されておらずアートに触れる機会が限られていること、不登校をきっかけにひきこもりになるケースも少なくないため社会とのつながりをもとめる場が必要であることなど、「キンビ美術部」への期待が寄せられた。

(2) 内容について

❶「すきなこと教えて」

日時と会場
令和6（2024）年7月16日（火）10：00～　横手市適応指導教室 西かがやき教室 14名
13：30～　横手市適応指導教室 南かがやき教室 4名
令和6（2024）年7月23日（火）13：30～　秋田県立横手高等学校定時制課程 4名
スペースイオよこて 5名
令和6（2024）年9月 3日（火）13：15～　秋田県立角館高等学校定時制課程 3名

ファシリテーター
秋田公立美術大学・教授　安藤郁子氏、秋田公立美術大学　大学院1年　藤原櫻和子氏

内　容
児童生徒との関係構築を目的としたアート活動
（見えないキャッチボール、お話をつくろう、音楽を描くなど）

❷「ミュージアムトリップ①～県立美術館へ行こう～」

日　時
令和6（2024）年9月18日（水）9：20～15：30

会　場
秋田県立美術館、秋田市文化創造館（秋田市）

交通樹段
貸し切りバス

ファシリテーター
秋田公立美術大学・教授　安藤郁子氏、秋田公立美術大学　大学院1年　藤原櫻和子氏

ギャラリートーク
秋田県立美術館・学芸員　小泉俊貴氏

参加者
25名（内引率4名）

内　容
企画展　平野政吉コレクション「絵画の中の『街』」、
特別展「深堀隆介展　水面の揺らぎの中へ」鑑賞、昼食、交流

❸「土でつくろう①」

日　時　令和6（2024）年10月1日（火）9：20～16：00

会　場　秋田公立美術大学（秋田市）

交通樹段　貸し切りバス

ファシリテーター　秋田公立美術大学・教授　安藤郁子氏、秋田公立美術大学　大学院1年　藤原櫻和子氏

参加者　18名（内引率4名）

内　容　秋田公立美術大学見学、粘土制作

▲野焼きした作品

❹「土でつくろう②」

日　時　令和6（2024）年10月31日（木）9：20～16：00

会　場　地蔵田遺跡「弥生っこ村」（秋田市）

交通樹段　貸し切りバス

指導者　地蔵田遺跡「弥生っこ村　村民会（野焼きボランティアの皆さん）」、
秋田市観光文化スポーツ部文化振興課　文化財担当　伊藤才城氏、
秋田県立博物館　副主幹（兼）チームリーダー　加藤竜氏
秋田公立美術大学・教授　安藤郁子氏、秋田公立美術大学　大学院1年　藤原櫻和子氏

参加者　13名（内引率4名）

内　容　自分たちで制作した作品の野焼き、採取した草などでの描画

▲草や木を使って書いた文字

❺「土でつくろう③」

日　時　令和6（2024）年11月7日（木）9：30～12：00

会　場　秋田県立近代美術館

ファシリテーター　秋田公立美術大学・教授　安藤郁子氏、秋田公立美術大学　大学院1年　藤原櫻和子氏

参加者　21名（内引率3名）

内　容　土や炭を素材とした画材での大画面描画（共同制作）

◀共同制作した作品

❻「土でつくろう④＆ミュージアムトリップ②」

日　時	令和6（2024）年12月20日（金）9：30～12：00
会　場	秋田県立近代美術館
ファシリテーター	秋田公立美術大学教授 安藤郁子氏、秋田公立美術大学大学院1年　藤原櫻和子氏
参加者	28名（内引率5名）
内　容	様々な画材での大画面描画（共同制作）と特別展「金曜ロードショーとジブリ展」鑑賞

❼「展示に挑戦」

日　時	令和7（2025）年2月4日（火）10：30～12：00
会　場	秋田県立近代美術館
ファシリテーター	秋田公立美術大学大学院1年　藤原櫻和子氏
参加者	25名（内引率5名）
内　容	「笑う!はひふへ展」への展示

参加者のことば
キンビ美術部の皆さんのことば

○「すきなこと教えて」の中で（やってみたいことがあったら教えて、という問いに対して

- みんなで思い出をつくりたい。
- 特にない。
- みんなの昔のエピソードを聞きたい。
- 強いていうなら体とか動かしたい。
- 醤油皿とか実用的なものをつくってみたい。
- 公民館とかもっと身近な場所でもやってほしい。

○「ミュージアムトリップ①」の感想から

- 友達と語り合いながら作品を見たりお弁当を食べて楽しかった。
- （展覧会のタイトル「水面の揺らぎの中へ」と同じ）自分の名前が初めて好きになりました。
- 骨の魚が大きくてびっくりしました。
- 作品の中で特に好きだったのが「ベルギーの田舎道」という絵で、絵の具をベタっと塗っている感じなのに、立体感があって素敵だと思いました。交流会では、皆さんの前で積極的に話すことはできませんでしたが、近くの人と絵の感想を伝えることができてよかった。
- 最初は不安だったけど楽しかったです。

○「土でつくろう①～④」の感想から

- はじめて粘土をさわって楽しかったです。
- 思ったより冷たくて、すべすべで匂いもなくてびっくりした。
- 人によって作品の作り方や感じ方が違うことが分かった。
- その時の気分で人それぞれ感じ方が違って、個性があふれる作品になるんだなと感じた。
- 秋田にこんな遺跡あるなんて知らなかった。びっくりした。
- みなさんによくしてもらって最高でした。
- みんなとのんびりできたことがすごく嬉しかった。
- 自分の作品が割れないかどうかすごく心配だったけど、きれいに焼けてうれしかった。
- みんなで協力してつくるのは初めてだったので大丈夫かな？とは思ったけど、それぞれの良さが生かされた作品が出来上がってうれしかった。
- 泥で描くという意外な発想で色の絵の具では出せない色合いが楽しかった。
- 泥は苦手だから素手では触れなかったけど、楽しかった。
- 最初は何をするか分からなくて不安だったけど、やっていくうちにだんだん楽しくなりました。完成した作品を見て、想像していたものと全然違う作品になってすごいと思った。

活　動　の　振　り　返　り

●楽しかった。一つの「旅」をしているようで新しい経験と発見ができた。友達と仲良くなれたような気がします。

●初めて自分を表現できた気がします。

●今まで交流できなかった人と交流できて新しい発見ができました。

●あんまり描かなかった絵もちょっと自信がつきました。

●新しい友達とか新しい活動とかできてとても楽しかった。

●土で作るというテーマで、茶色とか黄土色とかしかないからつまらないと思ったけど、色とかじゃなくてどう表現するか、どう形にするかということを学びました。

参加者のことば
各教室の先生方のことば

●様々な特徴をお持ちの子供さんたちなのですが、多くの配慮のおかげで体験や関わりをもつことができました。ありがとうございました。

●最初は行事参加をためらっていた生徒が、「行ってみると楽しかった」と、家族に話していたようでした。その生徒が、別の生徒がためらっているときに、「行ってみると楽しいよ」と声掛けをして誘ってくれていたようでした。ほとんどの行事に参加できた生徒は、「次はどんなことするんですか？」と興味津々な様子でした。繰り返し活動を計画していただいたおかげで、「前回は遠慮したけど、今回は行けそう」といった生徒にも参加のチャンスがあり、助かりました。

●美術鑑賞や美術大学での活動は、生徒たちにとって非常に刺激的で、多くのことを学ぶ機会となった。野焼き体験など、普段の生活では経験できない貴重な体験もできたと好評だった。ただし、移動時間や集合時刻の早さに苦労している生徒もいるという声も聞かれた。活動場所の拡大だけでなく、横手地域内で実施できるプログラムの充実も合わせて検討していただけるとありがたい。

▲ボランティアさんと一緒に野焼きに挑戦

▲野焼きした作品

●生徒が自分で参加を決め、初めての方と交流するという経験が、自信につながっていました。デッサンに挑戦したいという生徒もいましたので、今後、様々な分野に触れることが可能であれば、継続を希望する生徒がいると思います。また、今回は平日の開催のため、送迎の点でやむを得ず参加を断念することもありました。土日の活動も検討していただけるとありがたいと思います。本校では美術が開講されていないため、美術に興味・関心のある生徒にこのような学ぶ機会をつくっていただき、感謝しております。ありがとうございました。

●自分ではなかなか一歩踏み出せない生徒が多い中で、今回のキンビ美術部の活動は、大きな一歩を踏み出すきっかけとなった。作品づくりを通じた自己表現に興味をもつ生徒が増えたことは、この活動の大きな成果である。参加した先生方からも、「普段の学校生活では見られない生徒たちの新たな一面を発見できた」「普段あまり交流のない生徒同士が協力し、互いを認め合う姿が見られた」といった嬉しい声が聞かれた。

指導者による感想

藤原　櫻和子

（秋田公立美術大学大学院　複合芸術研究科修士1年）

「緩やかな関わり」という言葉が頭に浮かんだ。

大人と子ども、教師と学生など、年齢も肩書きも様々な人が集まり、その中でわたしたちは生きている。関係性にはっきりと線引きがあるのではなく、わたしたちの関係性はもっと緩やかなのではないだろうか。風が流れるように緩やかで。

最初の想いとして、1つ1つの活動が単体で完結するというよりも、全部の活動がつながって1つの流れとして見えるようにしたいと考えていました。そのため、自然素材（土、植物、炭など）を用いた活動を考えつつ、前回の活動で採取した素材を次の活動の時に使ったり、「みんなで物語をつくる」活動を一貫してやってみたりしました。自然素材に触れる活動はあまり身近ではありませんが、緩やかにひとの心をほぐしていくような力があるように感じています。

活動内容の提案側として、活動の全体を見なければならないという気持ちと、それでも生徒たちと同じ目線・立ち位置で活動に参加したいという気持ちがありました。そこのバランスが難しく、なんだか中途半端に行ったり来たりをしてしまったように思います。それが少し後残りでもあり、今後の課題の1つかなと思います。

指導者による感想

「キンビ美術部の活動について」

安藤　郁子（秋田公立美術大学・教授）

キンビ美術部は、各校を訪問し、子どもたちに活動に興味を持ってもらうことからはじまった。アートワークショップを実施し、その活動の中で、各自の好きなもの…音楽やアニメ・ゲームなどのこと、そして家族のこと、学校のこと等のはなしを聞かせてもらった。子どもたちは、既にこころの中に輝く鉱石のような感性と、自分の世界を持っていることを感じた。そこで、その後に続くキンビ美術部では、その世界を率直にさまざまな表現として表出してもらえるようにしていきたいと考えた。

部員が集まり、美術館での鑑賞や粘土による造形などの活動を展開させていく中で、子どもたちはおずおずと、そして時にのびのびと様々な表現を見せてくれた。本活動を通し、学校外に学びの場を広げること、さまざまな機関が連携し学びの場をつくることの重要性を実感した。そして何より重要なことは、自分の表現を受け止めてくれるひとがいる、安心で安全な場をつくっていくことだと感じている。キンビ美術部を、今後更に、共に活動する人たちとの関係の中で安心して自分の声を出すことができ、新しい自分が見えてきたり、自分に自信が持てたりするような活動に育てていきたい。

3. アートを通した学校等との交流

アートを通じた学校等との交流として、秋田県立横手支援学校と秋田県立増田高等学校の交流及び共同学習、あきた総合支援エリアかがやきの丘（秋田市）への出前美術展を実施した。

（1）秋田県立横手支援学校と秋田県立増田高等学校との交流及び共同学習の実践

「交流及び共同学習」とは、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が学校教育の一環として活動をともにする学習であり、人々の多様な在り方を理解し、互いに尊重し合うことの大切さを学ぶ機会となる。両校は、オンラインで交流2回、対面での交流2回を通じて、「笑う！はひふへほ展」に向けた「福笑い」の制作に取り組んだ。

▲パーツを置いて大きさの検討

▲福笑いの土台部分の色ぬり

増田高等学校生徒による感想

●今回、実際に近代美術館に行って、横手支援学校の皆さんと自分たちが作ったものを見せ合いながら福笑いをしました。目や口などのパーツを別のパーツに見立てて福笑いをするのも創造力が働くし、こっちのほうで作ったパーツを支援学校さんの土台を組み合わせたりもし、創造力次第で何通りのパターンもあるのだと感じました。一般公開の時には来てくださったお客さんにはぜひ、自分たちが作った顔以外にも新たな顔のアイデアを考えてみてほしいと思いました。

●今日は完成した福笑いのパーツを組み合わせて、実際に顔をつくってみました。目や口など同じ場所なのにそれぞれの個性があって見ていて楽しかったです。また、支援学校の人たちの動かせる口という発想が面白いなと思いました。みんなでお題を出し合って、パーツの特徴を活かして顔をつくるのも楽しかったです。パーツをそのまま使うことだけを考えていたけど、支援学校の人たちが逆さまにしてみたり、角を鼻にしてみたりして新しい発見ができました。みんなで福笑いをやって支援学校の人と前よりも仲良くなれたと思うので、同じように展示会でもたくさんの人が交流しながら楽しくやってほしいです。

指導者による感想

谷藤　弘美

（秋田県立横手支援学校　教諭）

美術を通した増田高等学校生徒との交流の、最初の2回はオンラインでの交流でした。画面越しでしたが交流を楽しんでおり、「早く会いたいな」と話す生徒もいました。3回目に増田高等学校で実際に会って一緒に福笑いのベース作りを行いました。始めは緊張していましたが、一緒に活動しているうちに和んで話す姿も見られました。

最後に近代美術館での交流では、趣向を凝らしたそれぞれの福笑いが完成しました。「自分とは違う発想があっておもしろかった」「楽しかった。また会いたい」と感想が聞かれました。

今回は大きなプロジェクトに参加したことで、生徒たちには期待感があり、他者の考えに触れ、同世代の友達とつながるうれしさを感じながら意欲的に活動できていました。美術は苦手と思っている生徒も、気負わずに、造形活動の楽しさと成就感を味わうことができたと思います。

指導者による感想

糯田　亜希子

（秋田県立増田高等学校　教諭）

今回、横手支援学校と増田高等学校で「交流及び共同学習」に参加させていただきました。

オンラインでの交流からスタートし、増田高等学校に支援学校が来校してのアート交流、最後に自分たちの制作した福笑いを持ち寄って美術館での交流では、緊張がすっかり抜けて互いにアットホームな雰囲気での交流ができていました。オンライン交流の当初は互いに緊張感がありましたが、イラストや似顔絵での自己紹介や同世代共通の“推し”の漫画やアニメについて話題にしたことがきっかけで互いの興味関心を知ることができ、一気に共感し交流が深まりました。

“福笑い”をつくる活動では事前に自分たちで話し合いをしてからオンライン交流に臨み、材料の買い出し等も自分たちで行くなど教師側はあまり手をかけずスケジュール管理に徹しておりました。生徒達が支援学校とのコラボに思いをはせながらの制作は学校祭の準備のようなわくわく感がありました。自分たちが発案し制作したものが、美術館に展示し沢山の人に楽しんでもらうものになる。これはなかなか経験できることではありません。

美術館での交流当日は、生徒の感想にもあるとおり、支援学校、増田高校が互いに同じプロジェクトのメンバーとして互いの制作やアイディアを試しながら楽しみ合う活動でした。これをきっかけに今後とも交流が継続していくことを願っています。

今回、このような交流と共同の機会を与えていただきましてありがとうございます。

▲思わずみんなで大笑い

(2) 出前美術展inかがやきの丘「みる・きく・さわる　みんなで楽しむキンビアート」

あきた総合支援エリアかがやきの丘（秋田県立視覚支援学校、聴覚支援学校、秋田きらり支援学校）の交流ホールを会場に、当館所蔵の立体作品7点と《不忍池図》レプリカを展示した。《不忍池図》には、触って鑑賞できる3D絵画「さわってみる絵」など、鑑賞支援ツールも併せて展示し、構図や「遠近感」といった見どころを楽しめるようにした。会期中には「おしゃべり鑑賞会」を8回、造形ワークショップ「粘土と友達！粘土で友達！」を1回実施し、3校の幼児児童生徒や地域住民との交流を図った。

出前美術展inかがやきの丘「みる・きく・さわる　みんなで楽しむキンビアート」

会　期　令和6(2024)年12月9日（月）～13日（金）

会　場　あきた総合支援エリアかがやきの丘　交流ホール

造形ワークショップ「粘土と友達！粘土で友達！」

会　期　令和6(2024)年12月10日（火）10：00～11：30

会　場　秋田県立聴覚支援学校

参加者　幼児児童生徒16名、地域の方15名

▲地域の方と一緒に制作

▲さわって見る

幼児児童生徒、地域の方、先生方のことば（抜粋）

「みる・きく・さわる　みんなで楽しむキンビアート」

- 小学部の児童は、解説を聞き、自分のやり方で作品に触れて味わうことで、じっくりと鑑賞することができた。生活経験の乏しさからイメージ化が難しい児童が多いので、叩く前の銅版、ごつごつの大理石などがあれば、作品への感動をより深められるかもしれないと思った。
- 児童生徒からは、こんにゃく石が一番人気であったようだった。「柔らかそうなのに堅い」「不思議なバランスで宙に浮いている」ところが、見て・触れて「すごい！」と感じるポイントなのだろうと思った。接近視できることや触れることでさらに感動が深まる、いい「触って味わうアート」だと感じた。
- 本物に触れる経験ができてよかったです。「触ってもいいよ」と言っていただき、うれしかったのですが、生徒の手の可動域が狭く、さらに車椅子で近付けず、触ることができない作品が多かったのが残念でした。丁寧に解説していただけたのも、生徒にとって新鮮な体験になりました。
- 係の方が1つ1つの作品を丁寧に解説してくださって、とても楽しい時間となりました。考えの押しつけではなく、こちらに解釈の余地を残した上で、いろいろな視点に気付かせていただきました。また、触れる作品があったのが良かったです。きらりの子ども達にとっては、車椅子から手が届かない場合もあったので、手元に持ってきて触れるような小さいサイズがあるとさらにいいなと思いました。

「粘土と友達！粘土で友達！」

- いっしょにいるだけでなんだかたのしくつくれました。
- いっぱいねんどにふれて、いろんな物を作っているうちに仲よくなれました。
- ふだんは視覚の小学部3, 4, 5年生でやっている（なれている）けど、ふだん作らない物や使わない物を使ったりしたのが楽しかったです。
- グループの友だちと話をしたりいろんなアイディアをだしたりしました。たとえば、海の生き物を作るのに、すしやたこやき、ほうちょうを作ったりしておもしろかったです。それをして楽しい、おもしろい気持ちになりました。
- お菓子の家をつくりました。子どもたちと協力し、嬉しかったです。
- 何十年かぶりに粘土を触り、楽しい時間でした。みんな積極的に作りたいものについて発言し、思いがけないものができました。
- 高等部生になると、なかなかアイディアを出すのも周りの視線を気にしていることがあるけれど、今日の活動では、小学部の子どもたちが自由に発想を広げ、制作している姿に刺激を受け、自由に制作を楽しんでいました。
- 何かを作る体験を共にする中で、受け身でない、自然な交流ができ意義があったと思う。どの幼児児童生徒も本当に伝えたいことが自然に湧き上がってきていたと思った。地域の方との交流も生徒同士の交流もあり、よかったと思う。
- 生徒の実態に応じ参加ができるよう素材や内容を選べるといいです。
- 大量の粘土をダイナミックに使える活動であったため、児童生徒にとって楽しい体験になった。

◀「お菓子の家をつくりました！（手話で）」

4.「メタバース×キンビ」を活用した対話型鑑賞プログラム

近代美術館は、インターネットの仮想空間に美術館と所蔵する秋田ゆかりの作品を高精細に再現した、仮想近代美術館「メタバース×キンビ」の運用を令和6年4月より開始した。これを活用し、来館が難しい学校や社会福祉施設等を対象に鑑賞プログラムを実施した。

「メタバース×キンビ」を活用した鑑賞プログラムの特徴

- 時間や距離等を超えて、学校等での学習活動に効果的に活用できる
- 近代美術館に来館する学校等では、事前・事後の学習に役立てられる
- ガラスケースや照明等の制限がなく、作品を細部まで鑑賞できる
- 教室にいながら、近代美術館の学芸員と対話しながら鑑賞できる

※「メタバース×キンビ」の利用方法や鑑賞プログラム等は、近代美術館公式Webサイト(https://akita-kinbi.jp)で確認できる。

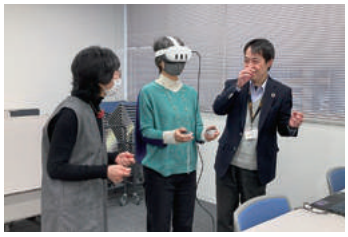
具体的な取組（ここでは2例を紹介する）

(1) 株式会社ALL-A※との実践

高齢者を対象に、「メタバース×キンビ」を活用した鑑賞機会の提供について意見交換を行い（10/29）、ALL-Aのシニア会員向けに鑑賞機会を提供することを試みた。

※株式会社ALL-A
民間事業者とシニア世代の方々によって新たなサービスや価値を共創するリビングラボ「Age-friendly Living Lab AKITA」を運営している。

【ALL-Aとのメタバース×キンビによる対話型鑑賞】



日　時	令和6（2024）年12月3日（金）10：30～12：00
会　場	株式会社ALL-A（秋田市）
参加者	ALL-Aシニア会員　10名
コーディネート	近代美術館　2名　＊操作支援：秋田県教育庁生涯学習課　2名

〈活動の流れ〉

- 対話型鑑賞のコーディネートは、近代美術館が務めた。
- 「メタバース×キンビ」の操作は生涯学習課職員2名が行った。2台のパソコンを使用し、1台はVRオフモードでアバターを操作し、鑑賞教材（メタバース上の展示作品）をモニターに表示し、もう1台はVRモードでアバターを操作してVRオフモードのメタバース上にアバターとして登場させ、鑑賞者を案内する形式を試みた。
- 館内を案内しながら、作品について「何が描かれているか」「作者の創作意図は何か」といった近代美術館学芸主事の問いかけに、参加者が自由に発言する形式で進行した。
- 次に、鑑賞した《不忍池図》に関連して、「みんなのキンビ」プロジェクトの取り組みと「さわれる絵画」を紹介した。
- VR体験および「メタバース×キンビ」に関する意見交換を行った。

〈所　感〉

●シニア会員の方々は70代・80代が中心だが、絵画鑑賞やデジタルデバイスへの関心が高く、終始活発な議論が交わされ、「美術に関心がなくてもデジタルに興味のある世代に魅力的」「美大生や中高生の意見を取り入れ事業展開しては」という意見もあった。

●三者の連携により、単なる体験に留まらない作品鑑賞に重点を置く試みは、メタバースを活用した鑑賞活動が十分に機能することが実証された。アバターで鑑賞者を案内することで、より臨場感のある鑑賞体験を提供できた。「メタバースであることを感じさせなかった」「没入感のある非常に楽しい鑑賞活動だった」という感想をいただいた。

●ALL-Aの担当者からも手応えを感じられ、シリーズ化を希望する声が上がった。今後は、オンラインの利点も考慮しつつ、鑑賞プログラムとして確立していきたい。

(2) 秋田県立視覚支援学校での授業実践

視覚支援学校高等部の授業時間内（教科：美術）に、近代美術館学芸員のコーディネートにより、「メタバース×キンビ」の体験および作品鑑賞を実施した。視覚支援学校職員には事前に体験いただいており、本プロジェクトの「出前美術館」においても連携した取り組み（粘土造形、『不忍池図』の触覚鑑賞）を実施していたことが、今回につながっている。対象生徒2名の視覚障害の程度は大きく異なるため、一緒に授業を受ける機会は少ないとのことだった。事前に授業内容や進め方について綿密な打ち合わせを行い、当日を迎えた。

【「メタバース×キンビ」の体験および作品鑑賞】

日　時　令和7（2024）年1月16日（木）14：00～16：00※活動は50分（授業内）

会　場　秋田県立視覚支援学校

参加者　視覚支援学校高等部生徒　2名（「Aさん」「Bさん」とする）
担当美術教諭　2名（「T1」「T2」とする）、その他教員等

コーディネート　近代美術館　1名（「学芸員」とする）　＊操作支援：秋田県教育庁生涯学習課　2名

〈授業の流れ〉

《会　　場》

学芸員、生徒2名は次の会場に分かれ、VRモードでともに鑑賞することを試みた。

・会場1　多目的ホール（写真1）：導入→Aさんの活動場所→活動後の振り返り
・会場2　Aさんの使用教室（写真2）：学芸員の活動場所
・会場3　Bさんの使用教室（写真3）：Bさんの活動場所　※Aさん、Bさんの教室は隣同士

《視覚障害の程度》

●Aさん（T1と生涯学習課職員が操作を補助）
全盲（光は感じるが形をはっきりと捉えられない）、近代美術館には行ったことがない。

●Bさん（T2と生涯学習課職員が操作を補助）
弱視（遮光眼鏡使用）、近代美術館にはよく訪れている。

《活動内容》

活動1 導入

・メタバースとは何だろう？（生涯学習課による解説）
・本時の活動について

▲写真1　Aさんの様子

活動2

《ミッション１》近代美術館学芸員（アバター）を探せ!!

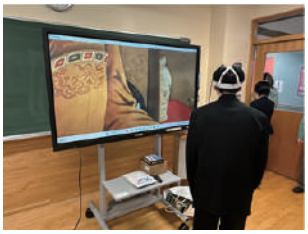
●3会場に分かれ、「メタバース×キンビ」をVRモードで操作し、仮想空間上でまずAさんとBさんが出会い、次に2人が学芸員と出会うという体験を行った。Aさんが1階エスカレーター付近から、Bさんが地階ホールからそれぞれスタートし、学芸員は5階展示室で待機した。Aさんは、声が近づいてくることでBさんの存在に気づき、自然と声のする方向へ体を向けた。2人が出会うと、身振りや音声によるコミュニケーションをしばらく楽しみ、その後、学芸員と合流し、アバター同士で握手を交わしたり、音声で挨拶をしたりした。

《ミッション２》学芸員から《不忍池図》のお話を聞こう!!

●まず、《不忍池図》（国宝・重要文化財）の作者・小田野直武が描いたもう一つの重要文化財《唐太宗花鳥図》を鑑賞し、学芸員が「秋田蘭画」の特徴を解説した。本作は三幅に分かれており、中幅には座した唐朝二代皇帝・太宗の左手に蝗虫（イナゴ）が描かれている。学芸員が「手に何かいるね？」と問いかけると、生徒たちは作品に近づいて観察していた。本作は直武が、故事に基づく漢画の伝統的ジャンルに、西洋画法（明暗・遠近）で挑んだ意欲作であることを、わかりやすく解説した。

●次に、直武の代表作《不忍池図》を鑑賞した（写真4）。直武が解体新書の挿絵に取り組んだ江戸在勤中に、不忍池の風景を近景（草花）・中景（池）・遠景（池対岸の町並みや空）に描き分け、特に近景を大きく描き誇張することで遠近感を強調している点に触れた。また、近景の3種類の草花が春・夏・秋と異なる季節に咲くこと、蓮池である不忍池に蓮の花が咲いていないこと（冬）から、本作が日本の四季を表現していることも解説した。

▲写真2　学芸員の様子


▲写真3　Bさんの様子

▲写真4　《不忍池図》を鑑賞する様子

活動3 **振り返り**（主な内容・やりとりは次のとおり）

T　2：短い時間でしたが、体験を通じてどのような感想を持ちましたか？

Aさん：VRゴーグルのおかげで、仮想空間でBさんや学芸員の方と出会いお話をじっくり聞けました。音声を通じてその場にいる感覚が高まり、楽しい時間を過ごせました。

T　1：Aさんは普段から音を頼りに生活していますが、同様に、VRゴーグルから他のアバターの声が聞こえ、それに体が反応していましたね。音を感じている様子が伺えました。

Bさん：離れていても、その場にいる感覚でした。今回は美術鑑賞でしたが、将来はショッピングなどもできるようになるのかなと思いました。不思議で、未来を感じる体験でした。

T　2：皆さんは12月に《不忍池図》の触覚鑑賞を体験し、今回はメタバース×キンビで同じ作品を鑑賞しました。2つの活動を通じて何か感じたことはありますか？

Aさん：12月に《不忍池図》に触っていたので、絵をイメージできたのは大きかったです。今日は花の種類や作品の意味なども知ることができました。ただ、私は映像が見えにくいので、今日も手元で絵に触れながら鑑賞できたら良かったかもしれません。

T　1：Bさんはアバターで作品にかなり近づいて鑑賞していましたね。

Bさん：はい。実際の美術館ではあそこまで近づけないので。メタバースだと限界まで近づけるのでじっくり見ることができました。もっと時間をかけて鑑賞したいと思いました。

T　1：Bさんは実際に近代美術館に行ったことがあり、美術館ではあそこまで近づけないことを知っていたので、メタバースの良さを実感できたのですね。

T　2：メタバース×キンビに、「もっとこうなったらいいな」という提案はありますか？

Bさん：触覚があればいいなと思います。物を触る体験もメタバースでできたらいいです。

Aさん：確かに、触れると絵の様子がより分かります。空間の匂いなども感じられたら、「ここにいる」という感覚がより強まると思います。

T　1：今は、目の前にあるものを説明してくれる視覚障害者向けアプリなどもあるので、そうしたものと組み合わせられたら、皆さんにとってより楽しめるかもしれませんね。

T　2：音の情報や説明がもう少し多いと、新しい場所でもより分かりやすくなりますね。

Aさん：最初にBさんと出会うために移動しましたが、「ここにエレベーターがある」「その先にエスカレーターが」といった周辺の情報が音声で入ってくるといいなと思います。

〈教員の感想〉

●障害の程度が異なる生徒同士が普段一緒に授業を行うことはあまりありません。今回、ともに活動でき、互いを補完しながらメタバースを活用することで、より体験が深まりました。

〈所　　感〉

●今回の活動は、全てをメタバース内で行うという貴重な事例となった。提供者側も学校側も、メタバースが視覚障害者の鑑賞学習支援にもたらす効果を直接知ることができたのは大きな成果だ。さらに、本プロジェクトとの連動により、全ての人に開かれた美術館を目指す今後の取り組みに、メタバースをどう活用するかというヒントを得ることができた。

5. 産業、福祉、教育など多様な機関が開発・展開する「鑑賞支援ツール」

「鑑賞支援ツール」の作成は、視覚のみに頼らない多様な感覚による美術鑑賞を試み、障害のある方のアクセシビリティの向上と、多様な人々との鑑賞機会拡大を目的としている。令和5年度に秋田県産業技術センターが当館所蔵作品《不忍池図》を題材に制作した3D絵画「さわってみる絵」をもとに、今年度は新たに秋田協同印刷株式会社と一般社団法人秋田県視覚障害者福祉協会の協力を得て、「さわってわかる！遠近法」をテーマに、ジオラマや立版古パネル※の作成、および昨年度制作の「さわってみる絵」の改良を行った。

ジオラマ

立版古パネル

さわってみる絵

描かれているモチーフを触れるように加工

スタンプ

展示の様子

※立版古（たてばんこ）…江戸時代後期に流行したおもちゃ絵の一種。立版古パネルは、《不忍池図》における遠近感や奥行を体感できるよう、距離に応じて分割した風景をパネル化したもの。

（1）これまでの取組の経緯

第1回鑑賞支援ツール作成検討会

日　時　令和6（2024）年4月23日（火）

会　場　秋田県産業技術センター（秋田市）

出席者　秋田県産業技術センター　内田富士夫氏、綾田アデルジャン氏、瀬川侑氏
秋田協同印刷株式会社　若松晃司氏
秋田県立近代美術館

内　容　昨年度から協力いただいている秋田県産業技術センターに加え、今年度は新たに秋田協同印刷株式会社の協力を得られることになり、昨年度の成果と課題を共有し、同社のレザーカット技術の活用について検討した。

▶レザーカット技術の可能性について検討

第2回鑑賞支援ツール作成検討会

日　時　令和6（2024）年6月24日（月）

会　場　秋田県立視覚支援学校

出席者　秋田県立視覚支援学校教員
澁谷デザイン事務所　澁谷和之氏
秋田県産業技術センター　内田富士夫氏、綾田アデルジャン氏、瀬川侑氏
秋田協同印刷株式会社　若松晃司氏、長雄彩生氏
秋田県教育庁生涯学習課　森川勝栄氏
秋田県立近代美術館

内　容　視覚障害のある児童生徒の学習状況を見学するとともに、同校教員と令和5年度制作の「さわってみる絵」の改善点について意見交換を行った。「さわってみる絵」のサイズや厚み、凹凸の差など具体的な改善点に加え、様々な見え方・見えにくさに対応するための助言をいただいた。

視覚支援学校の教員から助言をいただく▶

第3回鑑賞支援ツール作成検討会（オンライン）

日　時　令和6（2024）年7月9日（火）

講　師　跡見学園女子大学　茂木一司氏
星美学園短期大学日伊総合研究所 大内 進氏
宮城教育大学　梶原千恵氏

出席者　秋田県産業技術センター　瀬川侑氏
秋田協同印刷株式会社　若松晃司氏、長雄彩生氏
秋田県立近代美術館

▲オンラインでの検討会

内　容　視覚障害を含め多様な子どもたちの美術教育や触図制作を専門とする講師から、鑑賞支援ツール制作に関する指導を受けた。特に以下の2点を今年度の取り組みにおける重要な方向性として確認した。

❶鑑賞支援ツールは、作品の「翻訳」であり、伝えたいこと、すなわち見どころを明確にすること
❷絵の見方は多様であり、鑑賞支援ツールを活用することで、様々な人々がともに鑑賞し、「分からなさの共有」を通じて作品の理解を深める場を創出する

第4回鑑賞支援ツール作成検討会

▲改善点の検討

日　時　令和6（2024）年7月25日（木）

会　場　秋田県立近代美術館

講　師　跡見学園女子大学　茂木一司氏
宮城教育大学　梶原千恵氏

出席者　秋田県産業技術センター　綾田アデルジャン氏、瀬川侑氏
秋田協同印刷株式会社　若松晃司氏、長雄彩生氏
秋田県教育庁生涯学習課　森川勝栄氏
秋田県立近代美術館

内　容　第4回鑑賞支援ツール作成検討会では、これまでの検討会で挙げられた改善点を修正※し、新たに制作された「さわってみる絵」をもとに議論が行われた。講師からは、《不忍池図》の歴史的背景を含めた作品の魅力の伝え方、距離感や位置関係を把握するための地図を立体化、描かれた対象物の距離に応じたレイヤーに分けなどについて助言をいただいた。

※修正箇所：サイズ（300mm×218mm→360mm×264mm、厚みを3mm→10mm）、花や葉などの細部の省略

第4回鑑賞支援ツール作成検討会を受けた打ち合わせ

▲立版古パネルの試作の検討

日　時　令和6（2024）年8月5日（月）

会　場　秋田県産業技術センター（秋田市）

出席者　秋田県産業技術センター　瀬川侑氏
秋田協同印刷株式会社　若松晃司氏、長雄彩生氏
秋田県立近代美術館

内　容　第4回検討会を踏まえ、鑑賞支援ツールをとおして《不忍池図》の何を伝えるか、その見どころをどのように捉えるかについて検討した。本作は、作者の小田野直武が江戸時代において、従来の日本絵画では表現されなかった合理的な空間描写にいち早く取り組み、西洋の遠近法を日本に融合させた歴史的な作品であるという点に着目し、「絵画に描かれた遠近法を味わう」を鑑賞支援ツールのテーマに設定した。近景、中景、遠景をレイヤーで表現する立版古パネルに関しては、より親近感を持ってもらうため、秋田県民になじみ深い田沢湖やかまくらをモチーフにした試作品も提案された。この案は残念ながら見送られたが、《不忍池図》を年齢問わず楽しめる支援ツール制作という視点から、学校教材化という新たな可能性も生まれた。

また、「視覚のみに頼らない鑑賞ができる展覧会」の導入として、入口に触覚で文字を楽しむ「はてなボックス」を設置するアイデアは、実際の展覧会で実現された。

第5回鑑賞支援ツール作成検討会

▲新たなツール「ジオラマ」の提案

日　時　令和6（2024）年10月24日（木）

会　場　秋田県産業技術センター（秋田市）

講　師　跡見学園女子大学　茂木一司氏
星美学園短期大学日伊総合研究所　大内 進氏
宮城教育大学　梶原千恵氏
一般社団法人秋田県視覚障害者福祉協会　髙橋順子氏

出席者　秋田県産業技術センター　瀬川侑氏
秋田協同印刷株式会社　若松晃司氏、長雄彩生氏
秋田県教育庁生涯学習課　森川勝栄氏
秋田県立近代美術館

内　容　これまでの検討を踏まえ、「さわってわかる！遠近法」をテーマに制作した立版古パネルと「さわってみる絵」について議論を行った。今回は、一般社団法人秋田県視覚障害者福祉協会の副会長で全盲の高橋氏も出席され、《不忍池図》に描かれた対象物の距離感や位置関係を鑑賞者がより意識できるようにするためには、ジオラマが有効であるといった助言をいただいた。また、この鑑賞支援ツールを教育プログラムとして学校の授業に取り入れる可能性についても検討することができた。

鑑賞支援ツールのレビュー

日　時　令和6（2024）年12月2日（月）

講　師　秋田県社会福祉会館（秋田市）

出席者　一般社団法人秋田県視覚障害者福祉協会　髙橋順子氏
秋田県産業技術センター　瀬川侑氏
秋田協同印刷株式会社　若松晃司氏、長雄彩生氏
秋田県立近代美術館

▼視覚に障害のある方からのレビュー

内　容　新たに制作されたジオラマと、改良を重ねた立版古パネルや「さわってみる絵」などの鑑賞支援ツールを、高橋氏とともに確認した。「さわってみる絵」に関しては、葉の部分（表裏）の触覚の差異や、花の立体感の向上など、さらなる改善点を提示された。また、鑑賞時ののテキストについては、瀬川氏、長雄氏と高橋氏がメールで幾度もやり取りを重ね、視覚障害のある方が理解しやすい表現について指導を受け、完成に至った。

「鑑賞支援ツールの作成を通じて」

秋田県産業技術センター
先進プロセス開発部スマートものづくり技術チーム
瀬川　侑

今年度は秋田協同印刷株式会社様との共同プロジェクトとして、多くの方々のご協力・ご指導のもと、鑑賞支援ツールの改善に取り組みました。作成のポイントとなったのが「意図」と「納得」の2点です。昨年度の作成では立体化することを主眼においていたため、《不忍池図》の何をどう理解していただくか、という点が不明確になっていました。美術館の顔である《不忍池図》がどんな作品であるのか、多くの人に伝えるにはどうしたらよいか。検討会を通じて《不忍池図》で描かれた遠近法に着目し、さわるプロセスや理解しやすさを考慮して3次元データを作り直し、立版古やジオラマなどの新たなツールを加えることで、描かれた不忍池を立体的に理解する一連の体験プログラムにすることができました。視覚障害の方だけでなく、様々な立場の方が加わったことにより、鑑賞により深みが生まれ、納得感の高いものになったと思います。たくさんの方の思いが詰まった鑑賞体験をお楽しみいただければ幸いです。

「鑑賞支援ツールの検討と制作を通して」

秋田協同印刷株式会社　制作部
長雄彩生

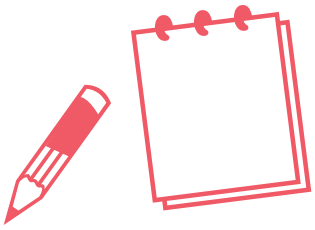
今回制作した鑑賞支援ツールは、「遠近感の表現」に焦点をあてて《不忍池図》を鑑賞するという試みで、各段階でツールを使い分けて絵や表現方法の理解を深められる内容になっています。《不忍池図》のモチーフの位置関係や表現方法について把握する段階を設けることで、鑑賞しやすくなったのではないかと感じています。ジオラマ、立版古、半立体パネルと、多様な鑑賞ツールを通して作品に親しんでいただければと思います。

本プロジェクトへの参加を通して、多くの方々からご協力とご指導をいただき、大変貴重な経験となりました。また《不忍池図》の作品の魅力に気付かされ、今回の展示をきっかけに、より多くの人に作品の良さが伝わることを願っています。これからの秋田や近代美術館において、素敵な美術の広がりが起こることを心から期待しています。

「鑑賞支援ツール作成検討会に参加して」

秋田県視覚障害者福祉協会　副会長
高橋順子

私は視覚障害者が絵画を鑑賞するのは難しいと思っていました。今年度は視覚障害者に遠近感を感じてもらうツールを作成すると聞いてワクワクしました。《不忍池図》の構図が分かるような不忍池のジオラマや、遠近感を触って感じる事ができる立版古パネルには、このような方法があったのかと感動しました。そして3Dプリンタで作成した「さわってみる絵」は、凹凸がありながら、スムーズに手を動かせる触感の完成度の高いツールとなっており、作成にはご難儀をおかけしたものと思います。関係者の方々には、専門的知識・技術を駆使して、素晴らしいツールを作成してくださった事に、心より感謝申し上げます。



6.「みんなのキンビ」プロジェクト企画「笑う!はひふへほ展」の開催

「笑う!はひふへほ展」は今年度の「みんなのキンビ」プロジェクトの成果を紹介する展覧会として開催した。展覧会にいらした方の誰もが楽しめる、そして、人とのつながりを感じられるテーマということで、今年度は「笑い」をテーマに設定した。楽しかったり、嬉しかったり、悲しかったり、悔しかったりと、いろいろな「感情」が見え隠れする「笑い」という不思議な感情をテーマに、作家や障害のある方、デザイン会社、各種学校の児童生徒たちと協働し、作り上げた展覧会である。見ることにとどまらず、触る、聞く、香りを楽しむなど様々な感覚で味わえる展示やワークショップを行い、小さなお子様や視覚に障害のある方など、たくさんの方にご来場いただいた。

▲ポスタービジュアル

会　期　令和7(2025)年2月8日(土)〜令和7(2025)年3月9日(日)

会　場　秋田県立近代美術館　5階展示室

観覧料　一般500円、大学生以下無料(会期中何度でも入場可能)

主　催　「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会

企画・トータルディレクション　澁谷和之氏(澁谷デザイン事務所)

協　働　藤　浩志(秋田公立美術大学・教授、NPO法人アーツセンターあきた・理事長)
安藤郁子(秋田公立美術大学・教授、NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事)
林容子(一般社団法人 ArtsAlive・代表理事)
秋田県産業技術センター
秋田協同印刷株式会社
一般社団法人 秋田県視覚障害者福祉協会

助　成　文化庁 令和6年度InnovateMUSEUM事業

▲高齢の方とのアート鑑賞会

■オープニングイベント

「誰もが、ずっと、その人らしくいられるためにアートができること」をテーマに、アート鑑賞会とトークセッションを行った。

アート鑑賞会　13:00〜14:00　5階展示室
林容子氏による認知症の方や高齢者の方とのアート鑑賞会
参加者　アート鑑賞会　10名
アート鑑賞会の見学　60名

▲トークセッション

トークセッション　14:30〜16:00　6階研修室
講師によるトークセッション
東京藝術大学・教授　伊藤達矢氏(オンラインでの参加)
一般社団法人 ArtsAlive・代表理事　林容子氏
秋田公立美術大学・教授、NPO法人アーツセンターあきた・理事長　藤浩志氏
参加者　37名

▲たくさんの方に参加いただいた

■展示作品

第1展示室

▲メインビジュアルが出迎える

▲「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」の文字が入っている「はてなボックス」
まずは手で読んでみる

1. 根子(ねっこ)集落という家族の笑顔　船橋陽馬(根子写真館)

根子は北秋田市阿仁にある小さな集落。マタギと番楽の里としても知られる。一年を通して家族のように寄り添い助け合って暮らす人々の笑顔を、この地に移り住んで10年になるフォトグラファー・船橋陽馬が撮り下ろした。

2. キンビコレクションで笑う

当館が所蔵する2,800点を超える美術品から、テーマに合わせて何点かの平面と立体作品を選び展示した。同じ作品でも見る人によって捉え方は違うが、今回の作品を見た鑑賞者はどんなふうに笑ったのだろうか。

3. 福笑い～アートを通した「交流及び共同学習」～横手支援学校×増田高等学校

「交流及び共同学習」とは、障がいのある児童生徒と障がいのない児童生徒が学校教育の一環として活動をともにする学習。横手支援学校と増田高等学校の生徒が「交流及び共同学習」で制作した大きな「福笑い」は、制作した生徒たちも来場者も大笑いさせてくれた。

4. 笑う門には福来たる　草薙デザイン事務所

展示室をつなぐ3つのゲート（門）には、草薙デザイン事務所が制作した「笑」の文字が生まれる由来にちなんだグラフィック暖簾（のれん）を設けた。舞い踊る巫女の姿に由来して生まれたとされる「笑」の文字をくぐりながら、鑑賞者に展示を楽しんでもらった。

第2展示室

5. 超美術館ロボ キンビオン　ココラボラトリー

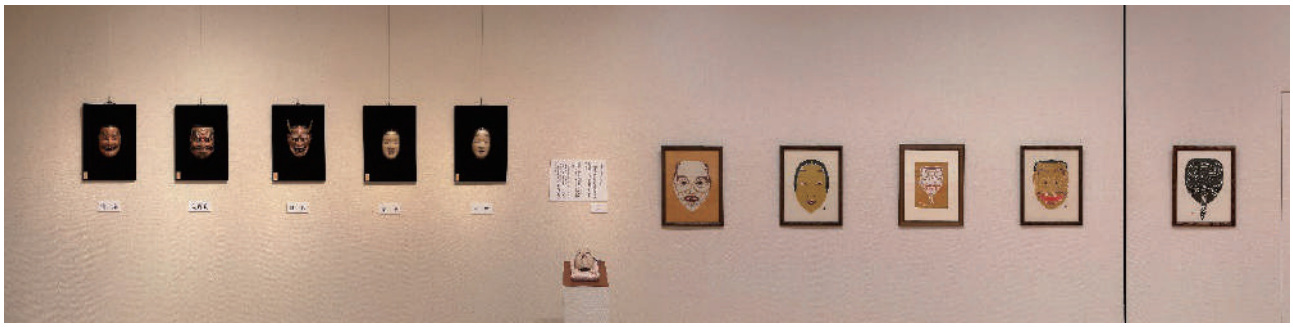
当館を題材にした「超美術館ロボ　キンビオン」はココラボラトリーが制作した。展示室の天井に届くほどの大きなロボットは段ボール製。胸から出す光は何を照らすのか。どこへでも美術を届けるキンビオンの、圧倒的な存在感が来場者の笑いを誘った。

6.《不忍池図》を“あじわう”鑑賞実験
秋田県産業技術センター・秋田協同印刷株式会社・一般社団法人 秋田県視覚障害者福祉協会

さまざまな機関と協働しながら、当館が所蔵する秋田蘭画のうちの1点《不忍池図》（重要文化財）をジオラマ、立版古、3Dプリンタでレリーフ状の「さわってみる絵」として制作した。さわって「見る」、話して「みる」、つくって「みる」など様々な見方で鑑賞してもらった。和紙の芍薬や《不忍池図》にいる蟻も立体となり、楽しんでいただいた。

7. 能面に「笑い（表情）」を観る　草薙デザイン事務所・石井和章

無表情に見える能面から笑いを考える展示。草薙デザイン事務所の能面をデザインした型染めと、当館職員の石井氏が制作した能面を見て、また手で触れながら、笑いを含んだ喜怒哀楽の様々な表情を楽しんだ。



8. 滲みあう部屋　アートリンク うちのあかり
「アートリンクうちのあかり」代表 安藤郁子

障害のある人たちなど多様な背景を持つ人たちが、自由に表現活動をしながら緩やかにつながる場「アートリンクうちのあかり」。そこから生まれたオリジナルキャラクターを展示し、来場者はその世界観を共有しながら創作活動を楽しんだ。表現を介して人と人とがつながる空間となった。

第3展示室

9. みんなのワハハプロジェクト
秋田公立美術大学・柚木恵介

秋田公立美術大学・柚木恵介氏が制作した笑い袋のコーナー。100人の笑いを100個の笑い袋に閉じ込めてぶら下げ、来場者にボタンを押してもらい、いろいろな笑い声を楽しんでもらった。

10. 藁を笑うな
美郷わらの会＋北のくらし研究所

藁細工の魅力や藁文化を伝承する活動を続ける『美郷わらの会』と美郷町を拠点とするクリエイターインレジデンス『北のくらし研究所』による展示。実際に使われたミノや雪を踏み固めるフミダワラなどを当館所蔵作品と一緒に展示し、生活の中で息づく藁文化を味わっていただいた。さらに、藁のラグやベッドなど現代の生活にも調和する新たな藁製品も展示した。

11.「出前美術館 in かがやきの丘」から
生まれた作品たち

あきた総合支援エリアかがやきの丘（視覚支援学校、聴覚支援学校、秋田きらり支援学校）で開催した「出前美術館inかがやきの丘」（12月9日～13日）で作った粘土作品を展示。普段一緒に活動することが少ない友達や地域の方と交流することで、「つくりたい、伝えたい」という気持ちが表れる作品となった。

12. 笑いの多様性　さくら国際高等学校秋田キャンパス

さくら国際高等学校秋田キャンパスの「美の国秋田クリエイトコース」に在籍する生徒が制作した作品。「高校生の今にしか描けないような表現がしたい」という自分の気持ちを、イラストや動画、マンガなどで表現した。展示会場に足を運び、仲間と一緒に展示作業も行った。

第4展示室

13. 小鳩の刺繍と祈りの写真
コバトのコトバ（代表・船木直子）

「福祉とは“特別なものでなく当たり前の暮らしの幸せ”なのだと思います。」「コバトのコトバ」を運営する船木さんの言葉である。あたたかさを感じる小鳩の刺繍と未来を感じる写真から、認知症になっても安心できる社会を考える展示となった。

14. キンビ美術部

キンビ美術部は、様々な事情がありアートに接する機会が少ない子どもや若者を対象とした「アート活動や交流体験を行う場」である。今年度は「自然」をテーマに、土粘土で制作した作品を野焼きしたり、和紙に墨や土で全身を使って描いたりした。作品展示作業も仲間で協力しながら自分たちで行った。

15. 笑う写真
視覚支援学校・聴覚支援学校・秋田きらり支援学校

視覚支援学校、聴覚支援学校、秋田きらり支援学校の児童生徒が、網膜投影技術を使うなどして「笑う・笑顔」をテーマに撮影した写真を展示。ファインダーの向こうの世界を撮影した写真からは、音や匂い、感触までもが伝わってくるようだった。

16. 笑馬に願い描こう
高性寺＋合同会社 運動＋澁谷デザイン事務所

「絵馬」の「絵（え）」を本展のテーマである「笑（え）」に変えて、ご来場いただいた皆さまに「笑馬」を描いてもらった。会場出口に飾った笑馬は、会場を出る来場者を笑顔にして送り出してくれた。また、昨年度来場者に描いていただいた大根絵馬を奉納する様子も写真でご覧いただいた。

Ⅳ のこす
～プロジェクトのアーカイブ化と公開～

■各事業の記録映像の制作と公開
■コミュニケータ、プロジェクト参加者によることばの収録
■AR機能の活用による実施報告書とHPの連動

Ⅴ ふりかえる
～評価とフィードバック～

■実行委員会の開催
（①「計画の策定と評価方法、目標の共有」、②「評価とフィードバック、次年度に向けた改善策提案」）

■PDCAサイクルを回す
（C⇔Aを重視）

【第1回「みんなのキンビ」実行委員会】

日　時　令和6（2024）年7月4日（木）13：30～

出席者　「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員16名

内容　多様な主体が有機的に協働し「みんなのキンビプロジェクト」を推進するため、課題の共有とその解決に向けた取組・方策等について協議した。

【第2回「みんなのキンビ」実行委員会】

日　時　令和7（2025）年2月14日（金）13：30～

出席者　「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員16名及び県立博物館施設職員3名

内容　多様な主体が協働する「みんなのキンビ」プロジェクトの実効性や持続可能性をより高めるため、今年度の取組成果と課題を共有し、来年度以降の取組の方向性や具体的方策等について以下の点について意見交換した。

〈持続可能な取組の方向性と課題・方策等の共有について〉
●ファンドレイジングなどの活動原資に関する方策等
●キンビコミュニケータによる企画・実践への支援方策
●博物館施設同士の連携方策、活動の展開

Ⅵ 今後に向けて
（成果　課題と方向性）

ここでは、「みんなのキンビ」実行委員会での各委員からの意見、各事業の参加者から寄せられた声に基づき、成果や課題を整理し、今後の取組の方向性を示す。

(1) プロジェクトを動かす組織づくりとネットワークの構築

【地域課題に包括的に対応する取組としての発展的な展開】

［成　　果］

●今年度は、不登校などの社会的に孤立しがちな子ども・若者や、認知症を含む高齢者との活動など、対象を明確にして取り組みを進め、それぞれのニーズを把握し、関係機関と協働して活動を展開することができた。

［課題と方向性］

●これからの美術館は、子ども・若者にとって家庭や学校から社会へとつながる場、大人にとっては社会参加・社会教育の場として、多様な人々が関わり、学び合う場となることが求められる。今後は地域や社会が抱える問題に対し、包括的に対応できるよう発展的な展開を目指していく。

【アートを通して人と人をつなぐキンビコミュニケータの実践】

［成　　果］

●高校生から70代までの幅広い年代が参加し、熟議をとおして多様な考えに触れ、自分の考えを明確にできた。

●「誰もが美術館で楽しむためには」というテーマのもと、キンビコミュニケータ自身が4つの企画を立案・実践できた。年少者向けの造形ワークショップ、視覚障害者との鑑賞、生きづらさを抱える人々との対話の場、多様な楽しみ方を提供するカフェなど、いずれの企画も、昨年度の課題であった「美術館を利用できない人々」や「アートを必要とする人々」とアートを通じてつながる機会となった。

●展覧会の関連イベントとしてのワークショップに加え、より継続的な取り組みも検討するなど、プロジェクトへの積極的な姿勢が育まれた。

［課題と方向性］

●日常的に活動できる場所や、キンビコミュニケータ間の連絡調整の方法が求められる。

●美術館の役割が多様化する中、様々な思いや経験を持つ人々との対話・思考・活動の場を、キンビコミュニケータとともに創出していくことが求められる。

●当館に限らず、県内各地でアートを通じたコミュニケーションが育まれる環境づくりを目指す。

(2) 地域とのアートプロジェクトの実践

【美術館に求められる新たな場の具体化】

［成　　果］

●地域との様々なアートプロジェクトの実践や、参加者等の「ことば」の収録をとおして、美術館に求められる新たな場としてのニーズを明確にすることができた。

［課題と方向性］

●**「安全な場所」多様性を肯定する場**
キンビ美術部の生徒の発言から、人の感じ方の多様性やその価値を学ぶ場へのニーズが明らかになった。美術館には、「何を話しても大丈夫」な「安全な場所」という心理的な安全性を確保し、作品を見て語る、対話の場が求められている。

●**身体全体を使って考える場**
「笑う！はひふへほ展」において、生徒たちが自らの手で作品を展示し、空間全体を通して作品と向き合う経験をした。視覚や知識だけでなく、人や作品を含む空間を身体全体で感じる経験など、身体全体を使った思考の場が求められている。

●**出会いとつながりが生まれる場**
来場者が絵を描き、作品の世界観を共有するコーナーを設けることで、来場者の当事者と意識を高めることができた。人と人との関係性から生まれる表現の多様性や自由さを感じる、出会いとつながりの場となった。これからの社会におけるアートの役割について検討が必要だ。

【障害者支援からユニバーサルな鑑賞プログラムへ】

［成　　果］

●今年度作成した鑑賞支援ツールは、《不忍池図》の「遠近感」の絵画表現の表現技法をジオラマやパネル、「さわってみる絵」で示した。県視覚障害者福祉協会を得て、視覚障害者のニーズに応じたツールを作成できた。

［課題と方向性］

●学校教材としての活用や、視覚障害者との共同鑑賞を通して、触覚情報と、視覚情報を組み合わせた鑑賞プログラムなど、鑑賞支援ツールを活用した多様な鑑賞プログラムを展開する。

【ファンドレイジングなど活動原資に関わる方策の検討】

［成　　果］

●日本ファンドレイジング協会主催の個別相談会で、活動原資に関する助言を受けた。財団の助成金獲得や企業との連携方法などの知識を得た他、特別展の一部を本プロジェクトへの寄付とする、募金箱を設置するなどのアイデアも得られた。

［課題と方向性］

●企業連携には経済的合理性がある提案と、プロジェクトの趣旨への共感を得るための十分なコミュニケーションが求められる。時間をかけて、地域に貢献したいと考える企業とのマッチングを目指す。

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会設置要綱

（名称）
第1条　この会は、「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会（以下「委員会」という。）と称する。

（目的）
第2条　委員会は、「みんなのキンビ」プロジェクト」（以下「みんなのキンビ」という。）の実施運営を行い、美術館を核とした多様な主体との協働による地域課題の解決を図ることを目的とする。

（委員会の事業）
第3条 委員会は、次の事業を行う。
（1）「みんなのキンビ」の実行に必要な企画及びその実施に関すること。
（2）「みんなのキンビ」の運営に必要な資金についての計画及び調達に関すること。
（3）その他「みんなのキンビ」の実行に必要な業務。

（委員会の構成等）
第4条　秋田県立近代美術館 館長 田中 博光（以下「甲」という。）とNPO法人アーツセンターあきた 理事長 藤　浩志（以下「乙」という。）は、第1条の委員会に委員を派遣する。

2　委員会は、別表の職にあるものにより構成する。
3　会長は、委員会を代表し、業務を統括する。
4　副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときはその職務を代行する。
5　会計については、委員会の事務を統括し、出納の責任者とする。
6　監事は、委員会の会計を監査し、収支決算を監査する。
7　人事異動等により構成員に変更があった場合は、後任の職務のものが任にあたる。

（構成員の任期）
第5条　任期は、委員会発足の日から事業が完了する日までとする。

（会議の招集）
第6条　会議は、必要に応じ会長が招集する。

（権能）
第7条　会議は、次の各号に掲げる事項を審議する。
（1）委員会の目的を達成するための基本的事項
（2）予算及び決算に関する事項
（3）委員会の規約に関する事項
（4）その他委員会の運営に関する重要な事項

（専決）
第8条　会長は、予算の補正その他緊急を要する事項について委員を招集し会議を開くことができないと認めるときは、これを専決することができる。
2　会長は、前項の規定により専決した事項について次の会議にこれを報告しなければならない。

（事務局）
第9条　委員会の事務を処理するため、甲に事務局をおく。
2　本会運営に関する急務が生じたときは、事務局団体がこれに当たる。

（事務局の設置期間）
第10条　設置期間は、委員会発足の日から事業が完了する日までとする。

（収入）
第11条　「みんなのキンビ」の開催に関する次の収入は、委員会の収入とする。
（1）「Innovate MUSEUM事業」補助金
（2）「あきたMuseum機能強化事業」負担金

（支出）
第12条　「みんなのキンビ」の実行に関する次の支出は、委員会の負担とする。
（1）「みんなのキンビ」研究会等の旅費及び謝金
（2）「キンビコミュニケータ」養成に係る旅費及び謝金
（3）「アート鑑賞プログラム」に係る委託費
（4）「メタバース鑑賞プログラム」に係る委託費
（5）「みんなのキンビ展」に係る委託費
（6）「キンビ美術部」に係る指導謝金及び材料費等
（7）その他実行に必要な経費

（金銭の管理簿）
第13条　委員会は、第11条に規定する委員会の収入を適切な金融機関に預け入れのうえ保管し、第12条に規定する支出を行う。

（決算報告及び会計監査）
第14条　収支決算報告等は、会期終了後に推定預金利息で決算し、会計監査を受けるものとする。

第15条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、会計が別に定める。

附　則
（施行年月日）
この要綱は、令和6年6月1日から施行する。

別表

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会の構成員

(1)	会長	田中博光	(秋田県立近代美術館・館長)
(2)	副会長	藤浩志	(NPO法人アーツセンターあきた・理事長)
(3)	委員	安藤郁子	(NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事)
		小野浩子	(横手市市民保健部まるごと福祉課　包括ケア推進係・保健師副主幹)
		内田富士夫	(秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・部長)
		綾田アデルジャン	(秋田県産業技術センター　電子光応用開発部・主任研究員)
		瀬川侑	(秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・研究員)
		岸上恭史	(秋田公立美術大学附属高等学院・教諭)
		柴田豪	(秋田県立横手支援学校・教諭)
		田口朋美	(秋田県立横手清陵学院高等学校・教諭)
		古屋桃香	(秋田県教育庁生涯学習課・課長)
(5)	事務局	木村雅洋	'(秋田県立近代美術館・学芸主事(兼)チームリーダー)
		保泉充	(秋田県立近代美術館・主査(兼)学芸主事)
		北島珠水	(秋田県立近代美術館・学芸主事)
	会計	照井裕奈	(秋田県立近代美術館・主任)
(6)	監事	高久豊	(秋田県立近代美術館　副主幹(兼)チームリーダー)
(7)	オブザーバー	森川勝栄	(秋田県教育庁生涯学習課・主任学芸主事)

あとがき

「みんなのキンビ」プロジェクトは、秋田県立近代美術館が中核となり、様々な機関や市民のみなさんとの協働を通じて、秋田に暮らす誰もがアートを楽しみ、アートを通じてつながれる地域づくりを目指す取り組みです。令和5年の改正博物館法施行により、美術館・博物館に社会包摂に貢献する役割が新たに求められたことを踏まえ、本プロジェクトを推進しています。

3年計画の2年目となる令和6年度は、昨年度の課題であった「美術館を利用できない人々」や「アートを必要とする人々」へアートを届け、アートを通じた交流の場を提供することを目標としました。新たに認知症を含む高齢者向けのアート鑑賞プログラムや、社会的に孤立しがちな子ども・若者向けのアート活動を展開しました。また、昨年度から継続している視覚障害者向け鑑賞支援するツールの作成や、障害のある子どもたちとの交流活動にも注力しました。

美術館に求められる役割が多様化する現代において、美術館を核にアートを通じた人と人とのつながりを創出する「キンビコミュニケータ」は、本プロジェクトにおいて不可欠な存在です。今年度は高校生から70代まで幅広い年代が参加し、「誰もが美術館で楽しむためには」をテーマに熟議を重ねました。参加者の感想に「美術館の敷居を下げるだけでなく、ともに作品を鑑賞し、見る力を養う場をつくることが重要だと気づいた」とあったように、単に作品を「見る」だけでなく、作品と向き合い、自分と他者の感じ方に関心を寄せながら「見る」場を創出し、「見る力」や「見えないものを見ようとする力」を育むことが、誰もが美術館を楽しむことにつながると考えます。

今年度の様々な活動を通じて、作品であれ人であれ、対象に関心を寄せることによってのみ理解が生まれることを実感しました。年齢や障害の有無など、それぞれの違いを受け入れ、支え合う共生社会、インクルーシブな社会の実現には、多様な人々が関わり合える場や、誰もが参加できる機会の保証、互いに関心を寄せながら対話できる場のデザインが必要だと考えます。アートを核とすることで、これらの場が実現可能であるという確かな手応えを感じました。

誰もがアートを楽しみ、アートを通じてつながる地域づくり目指し、秋田県立近代美術館の役割が明確になりつつあります。誰もが楽しめる、誰にとっても居心地の良い「みんなのキンビ」を目指し、今後も取り組みを進めていきます。

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会事務局
（秋田県立近代美術館・学芸主事）
北島　珠水

【謝辞】
本事業の実施にあたり、たくさんの皆様からご協力を賜りました。
ここに感謝の意を表します。

「みんなのキンビ」プロジェクト

本事業は3か年計画となっております。次年度以降の取り組みにつきましても当館ホームページで引き続きご覧ください。

令和6年度 文化庁 Innovate MUSEUM事業（地域課題対応支援事業）
「みんなのキンビ」プロジェクト　令和6年度　実施報告書

［企画・制作］秋田県立近代美術館・学芸チーム　北島珠水、保泉 充、木村雅洋
［ デザイン ］秋田県立近代美術館・学芸チーム　菅原 希
［印刷・製本］株式会社グラフィック
［発　　行］令和7年2月
［発　行　者］「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会
〒013-0064 秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62-46
秋田県立近代美術館内 TEL. 0182-33-8855　FAX. 0182-33-8858

無断転載厳禁